

An die Freude

佐久第九演奏会ニュース No11 H21.11.23

特別寄稿

佐久「第九」に寄せて

指揮者

藤本淳也

本年も皆さんと共に第九を演奏出来まことを心から嬉しく思っております。昨年の公演はアマチュアの演奏ではあってもオケ、合唱そして素晴らしいソリストとの共演で、全国に誇れる秀演であったと思います。さらに私が感心しましたのは、演奏の素晴らしさだけではなく、裏方を担当されている方々が練習日程や準備、メンバーの誘導などを熱心にされていたことです。このような皆さんの熱心さは、いらして頂いたお客様にも演奏を通してきつと感じ取って頂けたものと思います。



ところで、あつという間に一年が経過いたしました。皆様にはどのようなお過ごしになりましたでしょうか。激動する現代にあつても努力で目標を達成された方、感動的な一年を送られた方、病と闘われた方、また不条理な世の中でじつと耐えてこられた方など、たくさんの出来事があったことと存じます。また、聴衆の中にもいろんな思いを抱きながら佐久の第九を楽しまれた方、学校では学びえないものを演奏会から感じ取られた学生の皆さんもいらしたと推察いたします。

人は何かを失うことによって、そこに初めて大きな価値を見出すことがあると思います。そして、それを何らかの形で感情表現しようと思われても日常にあつてはその手段があまり見当たらないのではないのでしょうか。でもそれを大勢の方々と共に共有することが出来たなら、きつと失ったものはかけがえのない宝、心の支えとなり、以前あつた時よりももっと豊かなものへと昇華すると思います。

第九はそんな人々の思いを導き、苦しみを和らげる音楽で演じられていると思います。私としては楽曲分析的なことはあまり申し上げたくはありません。ただ、奏者それぞれの熱い思いから発せられた音を一つの大きなベクトルに束ね上げ、お客様と一体感ある演奏が出来ればと思っております。

ベートーベンは私にとって特別な作曲家です。皆さんと共に謙虚に、真摯に作品に向かいたいと存じます。

東京藝術大学音楽学部、安宅賞受賞、同大学院修士課程修了、指揮を佐藤功太郎氏に師事。
一九九五年、チェニで行われた「フアラの春」国際指揮者コンクールのセミファイナリスト。

二〇〇〇年、フィリピンを拠点にセブニュースシンフォニーオーケストラ (CTSO) を指揮。二〇〇一年、ロータリー財団奨学生としてベルリンに留学。ベルリン芸術大学 Peter Wittke 氏のオペラ実習クラスでマイケル・オベラを学ぶ。またベルリン国立歌劇場にてダニエル・バレンボイム氏のもと、モーツァルトのオペラを学ぶ。これ以外、群馬交響楽団、大阪センチュリー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団をそれぞれ指揮。韓国で行われた The G-Arts Festival Daejeon 2008 51st Ensemble Initiative TOKYO を指揮。日韓両国の現代室内楽作品を演奏。

近年は、都内オペラ団体の各公演に音楽スタッフとして参加。また、各地のオペラ団、オーケストラ、合唱団の指揮、演奏も行っている。本年は東京室内交響楽団ハンガリー、ブルガリア公演に参加。
東京室内交響楽団指揮者、昭和音楽大学非常勤講師。

本番まで2週間を切り、いよいよ今日からオケ合わせ(合わせ練習)です。藤本先生の指揮の下で、オケ、合唱団ともにこれまでの練習の成果を出し合い、力を合わせて今年の佐久「第九」を創り上げていきましょう。

演奏会まであと 13日